



Title	体育学の授業評価
Author(s)	井芹, 武二郎; ISERI, Takejiro
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 84, 75-83
Issue Date	2001-12
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.84.75
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28832
Type	departmental bulletin paper
File Information	84_P75-83.pdf



体育学の授業評価

井 芹 武二郎

Instructional Evaluation in Physical Education

Takejiro ISERI

目 次

1 はじめに	75
2 本学の授業評価と問題点	76
3 私の授業評価の方法	79
(1) 教材評価のアンケート方式	79
(2) 各授業時間の感想文方式	81
4 まとめにかえて	83

1 はじめに

本学では、平成11年度から全学教育科目と専門科目を対象に学生による授業アンケートを毎年実施することになり、点検評価委員会は教官に対して原則として1年に1回は授業アンケートを行なうよう勧めている。そこで、私は自分の担当している全学教育科目の体育学の授業について、平成11年度の後期と12年度前期に授業アンケートを行なったが、その分析結果が平成13年1月、点検評価委員会から送付されてきた。

もともと授業改善に関心をもっている私はこの点検評価委員会による授業分析に大いに期待していたが、アンケートの集計結果を示しただけのものであった。そこから何を反省するかは授業者の課題であるといっているようである。したがって、そのアンケート結果をもとに授業の問題点が抽出できないかを検討することにした¹⁾。

その結果、問題点として明らかになったのは、アンケート以前に十分承知していたことのみであり、新たにアンケートによる問題点の指摘と改善の示唆を得ることはできなかった。それでは何故、授業改善に有効な指針を与えることができないのか、授業アンケートのもっている問題について考察する。

次に筆者が独自に行なってきた授業評価を紹介する。

一つ目は平成10年度前期の体育学の授業を対象にした「教材評価のアンケート方式」である²⁾。これは授業の良否を決めるのは教材であるとの考えから、その教材が学生に受け入れられたかどうかを各教材ごとに評価してもらう方式である。

二つ目は平成13年度前期の体育学の授業を対象にした「1時間の授業ごとの感想文方式」である。これは授業終了直後に授業の感想を自由に記述してもらう方式であるが、教材内容につ

いての感想を具体的に知ることができる。これら二つの授業評価は問題点を明らかにし授業改善の契機になるが、その事例を示す。

最後に、学生による授業アンケートの問題と私の実践している授業評価の検討を踏まえ、本学の授業評価のあり方にとって、もっとも基本的な問題点を指摘する。

2 本学の授業評価と問題点

平成12年度前期、全学教育科目の体育学の授業について学生による「授業アンケート」を実施した。授業は水曜日の1講目、受講生は水産学部1年のテニスコースを選択した48名の学生(男子22名、女子26名)であるが、アンケート提出者は38名である。

点検評価委員会によるアンケートの集計結果と自由意見欄の内容は表1、表2に示すとおりである。

設問は17項目から構成されているが、各項目の評点については以下のように設定されている。

設問1~11, 13~15, 17の「5・4・3・2・1」は「強く思う・そう思う・どちらともいえない・そう思わない・強くそう思わない」を意味する。

設問12の「5・4・3・2・1」は「A極めて難しすぎる・B難しすぎる・C適切・Dやさしすぎる・E極めてやさしすぎる」を意味し、設問1~15の平均値を算出するために「C→5・BとD→3・AとE→1」として計算されている。

設問16の「5・4・3・2・1」は「100%・80%・60%・40%・20%」を意味するということである。

その他、点検評価委員会から送られてきた「授業アンケート」集計表には表1・表2では省

[表1] 授業アンケート集計表

設問内容	5 (%)	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)	無回答 (%)	平均	全 体 平 均
1 シラバスは、授業の目標、評価方法を適切に示していた。	13:16	47:37	34:21	2:63	2:63	0:00	3:66	3:58
2 授業は体系的に行われていた。	18:42	47:37	28:95	5:26	0:00	0:00	3:79	3:81
3 教官の熱意が伝わってきた。	28:95	39:47	28:95	2:63	0:00	0:00	3:95	3:87
4 教官の話し方は聞き取りやすかった。	15:79	28:95	42:10	10:53	2:63	0:00	3:45	3:69
5 授業は、難解な概念、理論があっても、わかりやすかった。	10:53	28:95	47:36	13:16	0:00	0:00	3:37	3:37
6 授業により知的に刺激された。	5:26	31:58	39:48	18:42	5:26	0:00	3:13	3:51
7 黒板、スライド、OHP、ビデオ、教科書、プリント等の使われ方が理解の促進に効果的であった。	13:16	36:84	36:84	10:53	2:63	0:00	3:47	3:44
8 教官は効果的に学生の参加(発言、自主的学習、作業など)を促した。	18:42	34:21	34:21	13:16	0:00	0:00	3:58	3:26
9 教官は学生の質問・発言等に適切に対応した。	28:95	44:74	23:68	2:63	0:00	0:00	4:00	3:62
10 授業の進行速度は適切であった。	5:26	23:68	42:12	23:68	5:26	0:00	3:00	3:58
11 授業で要求される作業量(レポート、宿題、自習など)は適切であった。	10:53	36:84	47:37	5:26	0:00	0:00	3:53	3:60
12 授業内容の難易度は適切であった。	5:26	21:05	60:53	10:53	2:63	0:00	4:05	3:86
13 授業の履修目標を達成できた。	13:16	34:21	36:84	13:16	2:63	0:00	3:42	3:33
14 授業内容と他の領域との関連について理解できた。	5:26	31:58	42:10	10:53	10:53	0:00	3:11	3:46
15 授業により、新しい知識、考え方、技能を習得でき、さらに深く勉強したくなった。	15:79	47:36	26:32	10:53	0:00	0:00	3:68	3:45
平均値	17:54	34:21	36:15	9:47	2:63	0:00	3:55	3:57
16 この授業の自分の出席率は()%程度であった。	60:53	34:21	5:26	0:00	0:00	0:00	4:55	4:44
17 質問、発言、調査、自習などにより、自分はこの授業に積極的に参加した。	23:68	39:48	34:21	2:63	0:00	0:00	3:84	3:09

略したが、全学教育と専門教育、講義と演習、必修と選択を区別しての評点の平均値が示されている。また、別紙において平成12年度(前期)授業アンケートの評点平均の度数分布が示され、私の評点平均値3.55は全体の565名中318位、全学教育の180名中93位に位置付くことが記されている。(体育学は演習科目として処理されているが、50名前後の受講生を対象とした演習科目が成立するのであろうか? 一方、11年度後期の体育学は講義に分類されているが?)

さて、点検評価委員会は以上のようにアンケートの集計結果を示しただけで、個々の授業の改善すべき問題点が何かについては何ら言及していない。その問題の分析については実際に授業を行なった本人に任せられる性質のものであるというのであろうか。

そこで、このアンケート結果から授業の問題点が明らかにできるのか検討してみたい。点検評価委員会ではアンケート結果の解釈にあたり、「評点4と5の合計した比率を中心に解釈を進め、4と5の合計がほぼ半数、1と2の合計が約10%以下を高い評価、あるいは良好な評価とみなす」という視点を定めている³⁾。この視点を参考に、評価の低いほど問題点を含んでいる可能性が高いという仮定のもとにみとめることにする。

まず、もっとも評価が低いのは、「授業の進行速度は適切であった」の項目である。即ち、4と5の合計「そう思う」が約3割と少なく、逆に1と2の合計「そう思わない」が約3割も占めている。この「そう思わない」の比率は他の項目と比較してみてもかなり高いことがわかる。

受講生は何故このような評価をしたのであろうか。その答は考えるまでもなく、自由意見の欄に数多く指摘されている。即ち、それは「前半の授業でコートが使えなかったのが残念。しっ

[表2] 自由意見欄の内容

1	もっと頻繁にコートを使って練習したかった。
2	はやめにゲームをやりたいかった。もっとコートを使いたかった。
3	テニスが改めて学ぶことができ、おもしろかった。
4	楽しかったですが、やはり1講目はきつかったです。授業内容は自分にあったものであったと思うので、よかったです。
5	前半の授業でコートが使えなかったのは残念。しっかりと練習できるような時間と場所(コート)がほしかった。
6	ほんとの初心者向けの授業だったからかもしれないが、練習時間があまりにも短かったような気がした。
7	もっと場所をかくほしてほしかった。
8	体育は楽しいので2年でもやりたいです。
9	前にも書いたが、模造紙の線が薄く細いため、とても見にくかった。見にくいというより、見えなかった、という方が正確なくらい……。あれはもう一度作り直した方がいいと思う。あと雪の為とはいえ6月半ばまで外のコートが使えないというのは納得できなかった。
10	サーブのやり方などがわかってよかった。もっとうまくなれたらよかったけれど授業はよいものでした。
11	テニスが楽しくできました。
12	コートが整っていなかったのと、雨が多かったのとで外でできる機会が少なかったのが本当に残念だった。でも、テニスは楽しかった。
13	少しテニスがうまくなったような気がします。テニスの基本を教えてもらって、とてもよかったです。
14	テニスはとても楽しかった。これからも、テニスを楽しんでいきたい。

かりと練習できるような時間と場所（コート）がほしかった」に代表されるようにコート整備の遅れによってシラバスで予定していた内容が消化できなかったことによるものである。この点についての状況を補足すると例年は遅くとも5月の連休明けにはコート6面が使用可能であった。しかし、平成12年度は連休明けに2面、第8週目にあたる6月中旬に2面、そして、あとの2面は最後まで整備されず使用できなかった⁴⁾。シラバスの内容は例年のようにコート6面の使用を予定し、1面に1グループ8人、6面で6グループ48人の受講生を受け入れることを前提としたものであった。その前提条件が大きく崩れ、さらに、降雨によるコート使用の中止などもあって実際の練習は例年の半分程度しかできなかったのである。このような状況を考えると、授業進捗の評価がこの程度で済んだのがむしろ不思議なくらいであるが、まずもって、改善すべき問題点の第一としてあげることができる。

そのつぎに評価の低い項目は「授業により知的に刺激された」と「授業内容と他の領域との関連について理解できた」であるが、「そう思う」3.7割、「そう思わない」が約2割、「どちらともいえない」4割と評価は三分されている。しかし、この項目の問題点を実際の授業過程に見いだすことはできない。

その他の項目についての評価は、とくに高くはないが低いという程でもない。そして、とくに、問題となるところを思い出すことができない。

この評価の低さによって問題点を捉えるということは、授業者の方で何か思い当ることがあればよいのだが、そうでなければ極めて困難である。先に問題点としてあげた授業進捗の問題も正確に言えば、低い評価によって思い至ったというよりアンケート以前に十分承知していたことである。そして、その問題は評価点に反映しているといえるが、より有効だったのは自由意見の欄の具体的な指摘で確認できたことである。

ところで、問題点の摘出ではうまくいかなかったが、役にたった評価がある。それは総合的授業評価をあらわすとされる学生の満足度・達成度項目の評価である。即ち、「授業により知的に刺激された」「授業の履修目標を達成できた」の評価は高くはなかったが、「授業により、新しい知識、考え方、技能を習得でき、さらに深く勉強したくなった」は「そう思う」が6割を超え、「そう思わない」が1割にとどまり、高く評価されたことである。先述の問題をもった授業によってテニス嫌いの学生をつくりだしたのではないかと心配していたが、この評価をみて少しは救われた思いである⁵⁾。

次は、「授業アンケート」による授業評価のもつ問題点について検討する。それは評点平均値の問題であり、問題をもつ指数によって授業アンケートに応じた教官の授業の順位付けをしていることである。

点検評価委員会は「評点平均値を評価指数とし、全体を総合的に表現できる指数は有用である」と述べている⁶⁾。しかし、評点平均値がなぜ総合評価をあらわす指数になるのかは何ら説明されていない。アンケートの各設問の項目は確かに授業を構成する要素として、授業の一側面を表しているのであろう。しかし、各要素を単純に加算していけば授業の本質を示すことになるのであろうか。各項目を単純加算するということは、各項目を同等に価値づけしていることを意味している。その一方で「学生の満足度」の項目はそれ自体が総合的授業評価をあらわすといっている。この総合的授業評価の項目とそうでない項目を単純に加算し平均化しているのが評点平均値である。評点平均値にはこのような問題を含んでいるのである。そして、このような問題を生じさせるのは授業の捉え方にある。

点検評価委員会の授業観は次のように述べられている⁷⁾。

授業は、その目標にしたがって、事前に周到に設計され、そのシナリオにそって施行される必要がある（シラバスとその内容）。

授業は、教師がいかに行なうかにかかっている（教師の授業法）。

授業は学生の参加をうながし、これに対応していく必要がある（学生参加）。

内容は、授業の受け手である学生が理解できないものでは意味がない（難易度）。

授業の成果は、受け手である学生の満足度、達成度ではかることができる（学生の満足度・達成度）。

学生の出席の程度は、授業の質によっても変化し、また、学生の意欲によっても異なる（出席・態度）。

個別の授業に対する設問以外の意見、および教育環境、授業環境に対する意見は、自由意見にあられる（自由意見）。

このように授業の枠組みを「シラバスとその内容」・「教師の授業法」・「学生参加」・「難易度」・「学生の満足度・達成度」・「出席・態度」・「自由意見（教育環境）」によって構成している。しかし、構成のし方は諸概念（諸命題）を羅列しているだけであり、授業全体の仕組みが説明できていない。したがって、重層構造をもつ授業に対して統合化の論理を欠落させたこの授業の枠組みでは独立した諸概念（諸命題）においてのみ有効であり、各要素が複雑に構成されたダイナミックな授業過程を捉えるのには不適切である。

この点の理解に欠ける点検評価委員会は枠組みの諸概念をもとにアンケート項目を作成するが、概念による項目数も無原則に設定し、さらに、その項目に同等の価値を与えた評点を単純に加算し平均化したのを評価指数として総合評価とするのである。

このようにして導かれた評価指数が果たして実際の授業全体をどれだけ正確に反映しているのだろうか、極めて危ういといわねばならない。そして、教官の授業順位付けの是非は別に議論が必要であるが、少なくともこの不確かな評価指数をもとに行なうことは重大な問題を含んでいることを指摘しておきたい。

3 私の授業評価の方法

(1) 教材評価のアンケート方式

授業は教師・教材・学習者の三要素によって構成され、三要素の相互作用によって成立する。体育学の授業を例に説明すると次のようになる。歴史的に形成されてきたスポーツ文化のなかから授業目標にしたがって学習すべき内容を設定する。そして、その学習内容の構造化とそれを含んだ具体的な練習方法を検討し、学習の順序構造（教材）を確定していくが、その際、学生の発達や関心・意欲が考慮される。この学生が直接働きかける教材の良さが授業の良否を決定的に左右し、実際の指導法の骨格となる。また、複雑な授業過程のなかで、スポーツ文化の認識・習得過程に一定の法則があるのではないかと仮定し、教材の順序構造を検討し、実践で検証するという探究の楽しみがある。以上が私の授業観である。

さて、アンケートの対象は平成10年度の体育学の授業である。水曜日の2講目、受講生は農学部一年のテニスコースを選択した47名の学生（男子19名、女子28名）であるが、アンケートの提出者は44名である。アンケートの結果は第3表のとおりである。

〔表3〕教材評価のアンケート結果

教材の内容	面白かった	役に立った
	3・2・1	3・2・1
(1) 小空間でのショートラリー	14・23・8	22・20・3
(2) 体育館球だしボールに対するストローク練習	15・22・7	20・20・5
(3) ベースラインからのグラウンドストローク練習	29・16・0	34・10・1
(4) サービスの実験もどき	17・22・5	24・18・2
(5) 打点を自己評価できるためのサービス練習	22・20・3	33・11・1
(6) 1/2コートストレートでのシングルスゲーム	30・8・7	21・19・5
(7) 1/2コートクロスでのサービス・サービスリターンからのラリー練習	32・11・2	30・12・2
(8) 班内ダブルス4ゲームマッチ	38・7・0	27・17・1
(9) 雁行陣による戦術とボレー練習	27・18・0	31・13・1
(10) 角度をつけたボレー練習	25・20・0	20・22・3
(11) 班対抗友好試合	41・3・0	33・10・1
(12) 授業全体を通して	(47人) 36・8・0	30・14・0

設問は学習順序にしたがって各教材が面白かったかどうか、役に立ったかどうかを3段階で評価させた。即ち、面白かった、役に立ったは3、普通は2、面白くなかった、役に立たなかったは1とした。

それでは授業の問題点を受講生の教材評価を手がかりに検討する。教材を二側面から評価させたが、役に立ったかどうかについては学習者の主観の評価だけでなく、データをとって教師側で客観的に評価できることである。しかし、面白いかどうかは学習者でなければわからないことである。そして、教材の価値を決めるのは学習者が面白く感じるかどうかである。それは教師は教材づくりにあたってはいつも役に立つことを考えてつくるが、学習者の役に立つの評価が低い場合でも面白いの評価が高い場合は練習を継続することによって低い評価をクリアできるからである。その逆は論理的にはともかく実際に成り立つかどうかかわからないが、その教材による練習は興味・意欲の面からも継続しがたい。したがって、教材価値の確定には学習者が面白さを感じるかどうかが決定的である。

以上のような観点からアンケートの結果をみていくと、まず、授業全体では44名中36名が面白かったと答えており、今回の授業を肯定してくれたといえよう。

しかし、問題点がないわけではない。第一は第2回目の授業で「小空間でのショートラリーの練習」である。面白いが14名(32%)と少なく、面白くないが8名(18%)と多く、気になる数字である。この練習は、ネットを挟んでサービスコート内でのラリーを行なうのであるが、今回の授業ではコート未整備のためコート2面を横に使用しての練習しかできなかったことに問題があるのではないと思われる。但し、面白くないとしたなかで経験者が多いことを考えると経験者に対し、この練習の一般的なねらいにプラスした課題をもった指導を検討することが必要であろう。いずれにしても、コート条件が整ったなかでの検証が必要である。

問題点の第二は第3回目の授業で「体育館での球だしボールに対するストローク練習」である。雨天のため体育館での授業である。狭いところで他人数が練習するため、安全面を考慮しての教材設定である。初心者に対して、相手のショットしたボールに対する予測・判断能力の系統的な発達の指導を重視している。そのような点ではこの教材は必ずしも適切ではなく、止むを得ない設定であったが、アンケートの結果はこの教材を受け入れた数字とはいえないだろう。

半数交代でも中空間でのラリー練習を行なった方が良かったのかもしれない。

問題点の第三は5回目の授業での「サービスの実験もどき」である。この実験では打ち下ろしのサービスでは入らないことを認識させることである。多くの人が予想したこととはずれ、意外さをもって認識をあらためる形になるのであるが、経験者ほどその程度が強い。サービス練習の導入としての教材であるが、アンケートの数字は満足できるものではない。再検討が必要である。その外にも問題はあがるが、以上の代表的な問題点の列挙にとどめておく。

(2) 各授業時間の感想文方式

一週間に一度、体育学の授業の時しか運動する機会がない学生は、授業で精一杯、身体を動かすことを期待している。授業目標の如何にかかわらずこの要求に出来るだけ応えられるようにしたいと考えている。従って、使用できるコート割には多数の受講生を引き受けざるを得ない授業では、一時間ごとに授業評価を行なう時間的な余裕はなく、どうしても最後の授業後にまとめて行なうことになる。

今回、平成13年度前期の体育学IIで少人数の授業を経験することができ、各授業時間ごとの感想文を書いてもらう機会を得た。体育学IIの授業内容はテニスの歴史・テニスの科学・テニスの教授学の理論学習を4時間、テニス技術と戦術についての実技学習を10時間実施した。感想文は実技学習の各授業終了直後5分間を使い、感想と質問を数行程度でよいからと指示して書かせた。

さて、感想文による授業評価は欠席の少なかった受講生5名による3回分の授業の感想文を対象に考察する。

まず、第2回目授業の感想文は次のとおりである。

今日はバックハンドストロークを教わった。思っていたよりはできたけれど、やはりコントロールが難しい。それはフォアハンドの時も同じだった。ボールには追いつけてもいい位置に立ち、かつコントロールを定めて相手に返すのはなかなかうまくいかないと思った。きちんとうしろに引いて打ったあとも振りきるといふのをラリーになると忘れがちになってしまうのを気をつけたい。(K)

腕の振りが加わると一段とコントロールするのが難しくなった。ボールの予測と位置取りで精一杯なところもあり意識してやるのも難しい。スピードボールを打とうと思っている時に山なりのショットがかえることが多々あった。バックハンドの正しい打ち方がいまいち理解できていない。(T)

テニスの握り方にも慣れてきたせいとか、さほど手首は疲れなかった。球の予測がまだ不十分なせいとか、バックスイングに入るのが遅いと思う。それがインパクトがきちんとできない原因につながっているのではないだろうか。バックハンドのショットは全くとばない。さらなる練習が必要でしょう。(M)

バックのとき、うまく打点をつかめませんでした。それからバックスイングの仕方がわかりません。フォアの方は比較的よくできるようになったと思います。ただ、やはり打点がいまいちつかめず、コントロールが悪くなってしまいました。(W)

先週のフォアハンドストロークに続き、今週のメインの学習課題はバックハンドストロークである。ボールに対する予測・判断力の発達を重視し、最初からペアによるラリー練習を行なった。そして、ラリーが常に10回少なくとも5・6回は続くような小空間から中空間の大きさで、かつ、ペアの一方はフォアハンドによって正確なボールを送るようにして練習した。

その結果、まず、面白かったかどうかは感想文からは定かでない。そして、実際のラリーがどの程度続いているかどうかは別にして、ボールの予測・判断、打点を含む打ち方を理解でき

るようには指導しきれていないことが分かった。

次は第4回目の授業の感想文である。

初めてのゲームだったが、ラリーがなかなか続けられなかった。大きく打ちすぎてアウトになったり、相手の球に追いつけずネットに引っかかったり。相手を動かすことよりもまず確実に真ん中へ返すことに専念したほうがいいのかもかもしれない。(K)

ゲームでラリーが続くと楽しい。今日のバックハンドのショットが良かったと思うが、どこがポイントになっているのだろうか。オーバハンドサーブに対するリターンがうまくいかない。スピードがつくとなおさらで、力みすぎてネットにかけてしまうところがある。(T)

ゲームをやってみて重要だと思ったのは、やはりボールをコントロールして相手コートに入れることだとわかった。それと深いところにボールがくると、とても返しづらかった。(H)

ゲームは楽しかったです。ただ、ボールを追って行って打点を合わせるのが難しくコントロールがめっちゃくちゃでした。サーブもなかなかうまくいきませんでした。最後の方は少し入るようになりました。(W)

先週の第3回目の授業でボレーとサービスの練習を行い、この4回目の授業でさっそくのゲームである。ゲームは4人とも後衛の陣型、アンダーハンドによるサービスで行なわせた。

その結果、ラリーは思うようには続けられなかったが、続くときもあり、ゲームは楽しめたようである。初心者の場合、個々の技術練習の意味を認識させるうえでもなるべく早くゲームを経験させた方が良く考えている。わずか4回目の授業であったが、ゲームは成立し、ゲームを通してボールをコントロールすることの重要性を認識したこと、さらに、「深いボールは返しにくい」という戦術初歩の認識を示しており、ゲームの主旨は達成されたのではないか。

次は、第7回目の授業の感想文である。

前回よりもリターンも入るようになったし、何よりダブルフォルトが0回だったのが嬉しかった。ボレーはまだ確実決まらないので、今回打てる場面は少なかったけれど次のゲームの時にはもっとチャレンジしていきたい。(K)

暑さのため、体にキレがなくしんどかった。相手にボレーを与えてしまうことは、自分たちのチームが不利に立たされるということで、山なりのロブやクロス打ちあるいはストレート打ちなどリターンにも工夫が必要だと思いました。とくに左側でするボレーが難しくコントロールがきかない。(T)

今日はサービスリターンの時にクロスを打つか、あるいは前衛の上を狙うか、ストレートで返すか等の選択があっけおもしろかった。また、前衛にいるときも、どういうボールが返ってくるか、とかサイドチェンジなどがあり、考えてゲームをするようになったと思う。(H)

今日は、サービスミスがあんまり無くて安心した。頭を越えるロブにトライしたがアウトになることも多く、練習が必要である。(M)

この時間の学習課題は複数の戦術を状況に応じて選択する練習である。まだ、個々の技術の出来不出来に関する感想もあるが、戦術選択の必要性や面白さを感じる感想もあり、全くの初心者であっても7時間目には戦術選択の練習が成立することを示している。

以上、技術練習、ゲーム、戦術練習の授業から各1時間ずつ取り上げ、感想文による授業評価を簡単に考察した。その内容は、面白かったかどうかは前提として、各授業での練習が通用したかどうか、授業目標がどの程度達成しているかどうかである。

前節の各教材項目を最後の授業後に3段階で評価するアンケート方式に比較し、同じ教材評価でもこの感想文による評価は、問題点がより具体的にかつ詳細に示されることに特徴がある。

4 まとめにかえて

本学の授業アンケートによる授業評価を自己の授業を対象に検証してみた。その結果、部分的に役立ったところもあったが、アンケートによって改善すべき問題点を探しだし、授業の改善に資するという本来の役割を達成することはできなかった。

アンケート項目は1時間ごとの授業の相違は捨象し、15週通した授業全体のある側面についての命題を評価させるようになってきている。そのため、評価が低くても具体的な問題点に思い至らなければ問題にならないという限界があり、一方、自覚できるほどの問題点はアンケート以前に承知していることとなる。いずれにしても問題点の抽出にはあまり適していないというのが検証からの結論である。

ところで、部分的に役立ったのは総体的授業評価をあらゆる項目の評価であったが、それは15週の授業を通すことによって初めて評価できるという評価対象の尺度が適合していることによるのではないかと思われる。また、今回、アンケート項目のそれぞれの内容について検討してこなかったが、それは論点を絞るためであって、その他のすべての項目の内容に同意している訳ではないことを付け加えておきたい。

さて、授業は教師によって意図的計画的になされる教授行為であり、そこには教育目標とそれを学習者に達成させるべき、教育内容・方法（指導過程）がある。授業評価はその指導過程や目標が適切であったのかどうかについて反省を加えることである。そして、これらは教師の授業観によって統一されている。したがって、授業評価は個々人の授業観のもとに目標・内容・方法に則した独自の方法で行なわれるべきものである。筆者の授業評価を紹介したのはそのことを具体的に示したかったからに他ならない。

点検評価委員会の授業観も一つの授業観でしかあり得ないし、それを基に作られたアンケートが授業観の異なる授業の総体的把握に不適切なのはあるいは当然なことかもしれない。

いずれにしても、点検評価委員会のアンケートが個別授業の分析と改善に資するという授業評価の本質機能からかけ離れ、偏った授業観（問題のある評価指数）に基づく教官の教育業績評価の資料に利用され、それは同時に点検評価委員会の授業観の「強制」による個人授業への冒瀆という悲劇を生み出すことである。

<注>

- (1) 本学の授業アンケートを実施した授業は11年度の後期体育学（バスケットボール）と12年度前期の体育学（テニス）であるが、評価の低いほうが問題点がやすいのではないかと考え、後者の授業（テニス）を取り上げることにした。
- (2) 平成10年7月17日、九州大学に於いて開かれた国立7大学（旧7帝大）の保健体育担当者連絡議会で発表した資料の一部を活用させていただいた。
- (3) 平成12年度北海道大学年次報告書「21世紀の大いなる展開に向けて」42頁
- (4) 体育学の授業は全学共通教育科目として教育学研究科・教育学部の健康スポーツ講座が責任をもっているが、授業で使用する体育施設は学務部・学生課の管理のもとにあり、コート整備の責任は学生課にある。
- (5) この項目の高い評価は授業の成果であるとはいえない。むしろ、練習や試合が十分できなかったためにもう少しやってみたくて読むべきであろう。低い評価が問題点につながらなかったように高い評価が必ずしも授業の成果ともいえないのである。
- (6) 平成12年度北海道大学年次報告書「21世紀の大いなる展開に向けて」62頁
- (7) 同上 32頁